万国博覧会にまつわること

2025年大阪・関西万博では、千葉県も「醗酵」をテーマにワークショップや体験コーナーを設けて、展示されました。
55年前1970年の大阪万博を振り返り、さらに古くウィーン万博の白みりんに関する新発見もありました。

秋元三左衛門 ウィーン万博の賞状

川根正教・松本武之

明治6年（1873）オーストリアウィーンで開かれた万国博覧会は、わが国が公式に参加した初めての博覧会である。現在開催されている大阪万博の来場者数は2,820万人を見込んでいるというが、ウィーン万博では722万5千人の来場者数があったという。

当時の日本では機械等の先端技術が未発達であったため、漆器・陶磁器や織物など、優良工芸品を中心として参加した。名古屋城の金のシャチホコなどの巨大物品も出品されている。資料は鉱山金属、農林、織物衣服、細工、木版、楽器など26の区に分類し出品された。

第四区「人工のかかりたる食物飲物」の一つとして秋元三左衛門の「味醂」、堀切紋次郎の「流山味醂酒」が出品されている。この区では政府出品の粉類茶製菓子、小田県※の葡萄酒・梅酒などとともに、秋元・堀切家のみりんは有功賞牌を受賞し、授与されたメダルはその後のみりんラベルのデザインとして用いられている。

受賞したメダルと賞状は堀切家では現在行方が分からなくなっており、秋元家ではメダルだけが大切に保管されていて、現在流山市立博物館で展示されている。しかし、賞状は行方不明であった。

本年5月のある日、東京農業大学の「食と農」の博物館の前橋館長からメールをいただいた。秋元三左衛門がウィーン万博で受賞した賞状が長い間同大学に保管されているが、その経緯をご存知ないかという内容であった。

以前にも秋元本家の美沙江さんにお聞きしたことがあったが、再度確認したところ、やはり経緯は不明であった。東京農大の醸造学部創設者である住江金之教授が、各地域の醸造に関わる資料を収集したことがあるので、その一環として同大学に存在する可能性が高いのでは、と推測されるに至った。

発見された賞状と添状
（東京農業大学「食と農」の博物館所蔵）

6月に入り、川根、流山市立博物館北澤館長、松本学芸員の3名で同博物館を訪れ、前橋館長・村山学芸員立会いの下、賞状を確認することができた。

賞状は表装された上で木製の額に収められていた。額の裏蓋には千葉県から授与された添状が貼り付けられており、賞状の寸法は縦46cm×横54cm、添状は縦19cm×横60cmである。

賞状にはドイツ語で万国博覧会の審査官から有功賞牌を授与すると記され、添状と内容も一致する。また、添状に「流山味淋酒製造社中ニ頒與スル」とあり、秋元家と同様に堀切家も同内容の賞状を授与されたと考えられる。

これらの資料はウィーン万博関連資料として、大変貴重な発見である。